教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 日本語日本文学科　　資格： 講師　　氏名： 小泉　京美

研究分野	研究内容のキーワード
日本近現代文学	近代詩,現代詩,モダニズム,日本語文学
学位	最終学歴
博士（文学）	

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.新聞記事活用サービスを利用した授業実践	2014年4月2014年7月	大学教育向け新聞記事活用サービス「朝日新聞デジタル for アカデミー」を利用した授業を実施。受講生は設定したテーマに関する新聞記事をデータベースで調べ、デジタルデータを編集してスクラップブックを作成。学習支援システムを利用して受講生間で共有し、情報を活用したディベートを行った。主体的な学びの促進を図るとともに、専門的知識を社会的な関心に結び付けることで就職活動の準備段階とし、キャリア意識の向上を試みた。
2.視聴覚メディアを利用した授業実践	2012年9月～現在	通信教育課程におけるメディア授業を展開。受講生は全12回の授業動画をインターネットやフラッシュメモリで視聴し、学習管理システムを通じて課題を提出。学習段階に応じた小テストや、レポート添削を行うことで、知識の定着と理解の促進を図る。多様な修学環境に対応し、受講生の関心や疑問への即応性を損なわない学びの実現を目指す。
3.通信教育課程における論文添削指導	2011年4月～現在	通信教育課程での論文添削指導を実施。受講生は段階的に課題を提出。参考文献や資料を幅広く調査し、情報を取捨選択して適切に論述や考察を展開しているかを評価。多様な修学環境に対応し、受講生の関心や疑問への即応性を損なわない学びの実現を目指す。
2 作成した教科書、教材		
1.改訂版高等学校国語総合　教授資料	2017年4月発行	高等学校国語総合の新教材である佐藤雅彦「「差」という情報」の教授資料を担当した。著者紹介・語句解説・参考資料等を収録する。
2.「知」の世界をひろげよう―基礎セルフディベロプメント科目・サブテキスト	2013年3月1日発行	アカデミック・スキルとリベラル・アーツの修養を目指す初年次教育のための授業用副読本として作成した。哲学、現代学、数理学、世界文学、社会学、地球学、歴史学の7 科目のうち、世界文学を担当し、日本の短詩型文学や植民地文学を題材に、世界文学としての日本文学、多様化する国際社会の中での日本文化について記した。
3.日本の詩歌―日本の近現代詩を読む	2012年9月1日公開	遠隔地からインターネットを介して受講するメディア授業のための専用教材として、学習管理システムを利用して配信している。授業内での討議や受講生からの要望に応じて更新、最新化を行い、授業内容の充実と理解促進を図っている。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.高等学校教諭専修免許状（国語）	2007年3月31日	
2.中学校教諭専修免許状（国語）	2007年3月31日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.両大戦間の日仏文化交流　REVUE FRANCO-NIPPONNE　別巻	共	2015年3月	ゆまに書房	【担当箇所】小泉京美「日仏芸術社と黒田鵬心」（「Ⅲ　日仏文化交流の記憶の場所」262～274頁）。戦間期の日仏文化交流について、日仏芸術社とその主催者の黒田鵬心の活動について論じた。美術評論家の黒田鵬心は、フランス人画商エルマン・デルスニスとともに、日本では海外美術展覧会の先駆けとなる仏蘭西現代美術展覧会を開催し、美術雑誌『日仏芸術』を発行するなど、日仏美術交流に尽力した人物である。日仏芸術社と黒田鵬心の活動の軌跡を辿りながら、戦間期における日仏美術交流の実態を考察した。【共著者】和田桂子・松崎碩子・和田博文・小泉京美ほか。
2.〈異郷〉としての大連・上海・台北	共	2015年3月	勉誠出版	大連・上海・台北という三つの港湾都市の近代化の道筋を辿りながら、19世紀後半から20世紀前半における日本人の「外地」での都市体験を考察。とくに大連における日本人社会の成立と変遷について論じた。【担当箇所】和田博文・横路啓子・小泉京美「座談会〈異郷〉としての大連・上海・台北」（第一章、2～44頁）、小泉京美「大連の日本人社会」（第二章、47～63頁）、小泉京美・和田博文・横路啓子編「大連・上海・台北　略年譜」（408～421頁）【共著者】和田博文・横路啓子・小泉京美・宮崎真素美・宮内淳子・高橋龍夫ほか。
3.コレクション・モダン都市文化　第5期　第85巻　満洲のモダニズム	単	2013年6月	ゆまに書房	満洲のモダニズムに関する資料の復刻とともに、テーマについてのエッセイ・解題・関連年表・主要参考文献一覧を収録した。エッセイでは、日清・日露戦争の従軍日記や、満洲を訪れた文学者の紀行文などを題材に、旅行者や短期滞在者の視線を通じて、日本人と満洲の関わりを概説した。さらに、長期滞在者や満洲在住日本人二世による文化運動や日本語文学の展開を通じて、日本と満洲をめぐるモダニズムの諸相を考察した。
4.満鉄と日仏文化交流誌『フランス・ジャポン』	共	2012年9月	ゆまに書房	【担当箇所】「大連とパリ」（「Ⅱ　満鉄―中国東北部からフランスへ　1906―1945」50～65頁）。帝政ロシアがパリを模して建設した中国の都市、大連は、日露戦争後に日本が租借し、北進政策の拠点、大陸開発の玄関口となった。以来、多くの日本人文学者が訪れ、紀行文や旅行記を残し、満洲在住の日本人による文学や文化の発信地ともなった。大連に端を発する日本のモダニズム詩の記憶は、敗戦後に引き揚げた日本人作家によって繰り返し描かれ、都市のモチーフが継承されてきた。大連という都市が日本近代文学に与えたものは何だったのか。その歴史と都市イメージの形成の過程を明らかにした。【共著者】和田桂子・和田博文・松崎碩子・小泉京美ほか。
5.コレクション・都市モダニズム詩誌　第2期　第18巻　美術と詩Ⅰ	単	2012年1月	ゆまに書房	1920年代に発行された詩雑誌・美術雑誌の復刻とともに、美術と詩をテーマにしたエッセイ・解題・関連年表・人名別作品一覧・主要参考文献一覧などの基礎資料を収録した。詩・絵画・写真・映画・演劇・建築など多様な芸術領域が交錯し、超域的に展開した日本のアヴァンギャルド芸術について、前衛詩運動と新興美術運動を中心に、詩人と画家の交流や、詩集・詩誌の装幀や挿絵の歴史、詩と美術の相互交渉や影響関係についてまとめた。
6.コレクション・都市モダニズム詩誌　第1期　第1巻　短詩運動	単	2009年5月	ゆまに書房	1924年に中国の大連で創刊された詩誌『亞』と短詩運動関連資料の復刻とともに、エッセイ・解題・関連年表・人名別作品一覧・主要参考文献一覧などの基礎資料を収録。エッセイでは、日本のモダニズム詩に先鞭をつけた『亞』の短詩運動の詩史上の意義と、大連の日本語文学の展開について考察した。関連年表は大連の社会・文化関連事項と短詩運動関連資料の書誌情報から構成されている。
2 学位論文				
1.一九二〇年代から三〇年代の前衛詩運動と満洲における日本語文学の研究	単	2015年3月	総合研究大学院大学	博士学位論文。一九二〇年代から三〇年代における日本の前衛詩運動と満洲における日本語文学の結び付きについて、大連で興った短詩運動を媒介に検討した。日本の新興芸術運動が、実践的に波及力の圏域を拡大する直接の契機は関東大震災にあり、さらにその後の

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
				植民地膨張という政治的与件に規定されている。本研究では日本に固有の文脈において前衛詩運動を捉え直すことでその表現の本質的な解明を目指した。
3 学術論文				
1.記憶の海を越えて―清岡卓行「アカシヤの大連」における詩と小説 ―	単	2020年5月	『現代詩手帖』63巻5号、58～62頁、思潮社	
2.彷徨する詩―東アジアと日本のモダニズム―	単	2019年8月	『現代詩手帖』、62巻8号、36～41頁、思潮社	
3.散文の時代の詩的精神―芥川龍之介の「の」を読む―	単	2019年2月	『日本文学』、68巻2号、86～90頁、日本文学協会	
4.萩原恭次郎・岡田龍夫『死刑宣告』論―関東大震災後の詩的言語とリノカットをめぐって―（査読付）	単	2015年5月	『日本近代文学』、第92集、17～32頁、日本近代文学会	記号活字やリノカットを駆使して視覚性を強調した萩原恭次郎の詩集『死刑宣告』は、詩の言語（symbol）から図像（icon）への移行を示す記念碑的詩集として捉えられてきた。だが、関東大震災という出来事に密着して考えるならば、『死刑宣告』がより本質的な言語の変容を記録していたことが見えてくる。震災による活字不足と新聞紙面の混乱、震災を契機に普及した素材リノリウムとリノカットという表現手法、これらを取り巻く文化史的な背景を検証し、その表現の独自性と新たな詩の読みの可能性を探った。
5.アヴァンギャルドの地政学―日本の前衛詩運動と植民地空間―	単	2014年10月	『東洋通信』、第51巻第4号、12頁～22頁、東洋大学通信教育部	関東大震災前後から昭和初期にかけて高揚した日本の前衛詩運動の波は、「外地」と呼ばれた日本の旧植民地・租借地にも及んだ。詩歌の伝統的規範の解体と言語表現の革新を目指した詩人たちにとって、そこは日本の風土や、それに支えられて発展した詩歌の伝統性から離れ、新しい表現形式を模索することのできる場所でもあった。日本の近現代詩にとって植民地という場が持った意味を考察するとともに、その営みが詩というジャンルの本質とどのように関わっていたかを考察した。
6.故郷喪失の季節―満洲郷土化運動と金丸精哉〈満洲歳時記〉の錯時性―	単	2014年6月	『フェンスレス』、第2号、5～22頁、占領開拓期文化研究会	満洲事変後に現地で興隆した「満洲郷土化運動」は、まず日本の伝統的な文学形式に満洲の独自性を盛り込むかたちで高揚し、「満洲国建国宣言」の後は、「建国理念」を基盤とする多文化主義的な文学運動として展開する。一方で脱植民地化を強調し、他方では日本語や日本文学の優位性を主張する満洲の文学状況は、満洲在住日本人二世の「故郷喪失」の問題を顕在化させた。満洲と日本をめぐる地政学的条件を読み解きながら、満洲在住日本人の言語表現の特質を探った。
7.大正の行楽文化と武蔵野	単	2014年4月	『Beauty Science』No.3、197～201頁、ビューティサイエンス学会	大正期の行楽文化は、近代化による都市の膨張と新中間層の拡大を背景に隆盛する。必ずしも名所・旧跡を訪ねることを目的としない慰安・休養としての行楽が一般化すると、行楽客は東京の郊外としての「武蔵野」に改めて目を向けるようになる。郊外電車などの交通網の整備と旅行雑誌や行楽案内などのメディアの進展を辿りながら、大正期の行楽文化と、郊外行楽地としての武蔵野に向けられたまなざしの諸相を明らかにした。
8.満洲郷土化運動と〈日本文学〉―短歌・俳句・歳時記―	単	2013年12月	『東洋通信』、第50巻第9号、21～30頁、東洋大学通信教育部	満洲事変後の満洲では、日本人の定着を目的に、地域の特性に根ざした文化・芸術の促進が試みられた。代表的な活動として、南満洲鉄道株式会社の社員会による「満洲郷土化運動」がある。満鉄の郷土化運動に日本の文学や文化が果たした役割は大きい。当初は日本の伝統的な文学形式に、満洲の地方色を盛り込むことで「郷土芸術」の模索がなされたが、次第にその理念は矛盾を露呈していく。満洲郷土化運動の展開を、現地で試みられた短歌と俳句の動向から明らかにした。
9.まなざしの地政学―大連のシュルレアリスムと満洲アヴアンガルド芸術家クラブ―	単	2013年8月	『アジア遊学』167、216～226頁、勉誠出版	日中開戦を契機に満洲で活発化する「満洲文学」をめぐる議論は、「内地」と「外地」、リアリズムとアヴァンギャルドが交錯する磁場で生成する。満洲を表象することは、日本語・日本文学にとってどのような営みだったのか。画家・詩人による大連のシュルレアリスムの軌跡を辿りながら、風景と言葉の乖離・齟齬が露見する植民地という場で模索された言語表現の可能性と批評性の評価を試み

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				た。
10.詩と版画の越境体験―自己の発見から内面への沈潜そして印刷術の総合運動へ―	単	2012年6月	『東洋通信』、第49巻第3号、19～30頁、東洋大学通信教育部	詩と版画の表現が密接な交渉をみせる時期は、明治末期から大正初期にかけて、ちょうど口語自由詩と創作版画の隆盛期にあたっている。西欧思潮の移入を受けて、複製技術からオリジナルな自己の表現へと版画が展開したことと、自己の内面に密着した表現を求めて、日常語による表現を選択した口語自由詩の状況は重なり合っている。本文と挿絵という表面的な相互補完の関係にあった詩と版画が、その工程に本質的な共通点を見出しながら共振していく過程を考察した。
11.「満洲」の白系ロシア人表象―「桃色」のエミグラントから「満洲の文学」まで―（査読付）	単	2012年3月	『昭和文学研究』、第64集、1～13頁、昭和文学会	昭和前半期、ロシア革命後に満洲に亡命したロシア人が暮らす地域に多くの日本人が関心を寄せた。日本から旅行や視察に訪れた文学者や芸術家はエキゾチックな素材として、満洲在住の日本人は「内地」とは異なる「満洲文学」の確立のために、満洲の白系ロシア人を創作に取り上げた。白系ロシア人に対する日本人のまなざしは、対ソビエト意識を反映して揺れ動き、「満洲国」の建国理念によって規定されていった。その変遷の過程を辿り、日本近代文学における満洲の白系ロシア人表象を分析した。
12.白山の詩人たち―東洋大学と南天堂の『白山詩人』―	単	2011年12月	『東洋通信』、第48巻第9号、21～32頁、東洋大学通信教育部	大正15年、東洋大学に在籍する詩人たちによって創刊された詩誌『白山詩人』は、ダダイストやアナーキストたちのたまり場として知られる白山の書店兼レストラン南天堂での交流から生まれた。昭和3年の終刊にいたるまで、前衛詩運動や新興美術運動に牽引され、プロレタリア詩の興隆期へ突入するまでの期間、白山の詩人たちがどのような交友関係の中で詩を模索していたか、南天堂と東洋大学という二つの場を通して実態に迫った。
13.「満洲」における故郷喪失―秋原勝二「夜の話」―	単	2011年3月	『日本文学文化』、第10号、79～90頁、東洋大学日本文学文化学会	国民国家形成の精神的支柱となった「故郷」という概念は、日本からの移民が推進された満洲においては、日本人の領有意識を喚起するための文化的な装置として機能した。だが、植民地主義的な理念に基づく満洲の郷土化は、日本人と在来の現地住民はもとより、「内地」の日本人と満洲在住の日本人の間の溝をも顕在化させる。同時期に「内地」で浮上していた「故郷喪失」をめぐる問題系との結び付きを検証しつつ、満洲在住の日本人の故郷観について考察した。
14.日本近現代文学文化における〈森〉の表象（査読付）	共	2011年3月	『東洋大学人間科学総合研究所紀要』、第13号、129～152頁、東洋大学人間科学総合研究所	日本の近現代文学に見られる〈森〉の表象のうち、満洲の日本語文学における〈森〉についての考察を行った。とくに満洲で活動した白系ロシア人作家ニコライ・バイコフの翻訳を手がけた長谷川濬が、その訳業を通じて満洲の自然に見出した意味について考えた。 【担当箇所】第2章「日本人が見た「満洲」の〈森〉」（135～143頁） 【共著者】石田仁志・早川芳枝・小泉京美
15.滝口武士『亞』から『蝸牛』への行程―変容する「外地」の風景―（査読付）	単	2010年5月	『日本近代文学』、第82集、140～155頁、日本近代文学会	滝口武士は日露戦争後に日本の租借地だった大連に渡り、詩誌『亞』に参加、短詩をはじめとする新詩運動の一翼を担った。満洲事変、日中戦争を大連で体験した滝口武士の詩の行程は、時代状況を反映して大きく揺れ動く。これまで『亞』における短詩のみが注目されてきた滝口武士の詩を、その後の展開も含めて時系列に分析することで、日本の植民地政策が日本語・日本文学にもたらした問題の所在を浮かび上がらせた。
16.病める身体の形象―「病院船詩篇」のモチーフ―	単	2010年4月	『現代詩手帖』、第53巻第4号、82～87頁、思潮社	荒地派の詩人、鮎川信夫の戦争体験と、それに基づく「病院船詩篇」の解釈を試みた。鮎川信夫は昭和18年4月にスマトラ島へ配属され、軍隊生活の渦中で肺結核を罹患、翌年6月に病院船で帰国した。戦争体験や病院船体験を通じて詩に形象化された身体イメージが、戦後に展開される鮎川信夫の詩的営為にもたらした意味を考察した。
17.詩・短歌・俳句・川柳の交差点―問題系としての短詩の生成―	単	2010年2月	『日本文学文化』、第9号、7～20頁、東洋大学日本文学文化学会	大正期に隆盛する短詩運動は、まず短歌・俳句・川柳などの定型詩が、定型を廃して自由律を確立するための運動として展開する。一方で口語自由詩が定着しつつあった詩の領域から、前衛詩運動の流れを汲む短詩が試みられた。ジャンルによって異なる形式的必然性と歴史的文脈をもつ試みが、短詩運動という同一の磁場へと流れ込む経緯を整理し、個々のジャンルにおける短詩の問題点を検討し

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				た。
18.『亞』の風景―安西冬衛と滝口武士の短詩―（査読付）	単	2010年2月	『日本文学』、第59巻第4号、20～31頁、日本文学協会	詩誌『亞』は大正13年11月に中国の大連で創刊された。多様な文化が混在する植民都市で発行されたことが『亞』の短詩運動の素地を形成している。同人の安西冬衛と滝口武士の詩からは、日本の租借地として近代化を遂げた大連という都市の成り立ちが、日本語や日本文学に与えた痕跡を読むことができる。『亞』の短詩を都市空間との結びつきから分析し、「内地」の短詩との差異を検討することで、植民地と日本語・日本文学の問題について考察した。
19.空洞化された〈吉野山〉―太宰治「吉野山」論―	単	2009年3月	『東洋大学大学院紀要』、第45集、35～49頁、東洋大学大学院	太宰治の翻案小説「吉野山」（『新釈諸国噺』昭和20年1月、生活社）と、その典拠となった井原西鶴「桜よし野山難儀の冬」（『西鶴全集』昭和3年3月、日本古典全集刊行会）の構造的特徴の比較から、「吉野山」の小説構造がもつ批評性について考察した。南朝の故地として文学的言説を通じて聖地化された吉野を舞台に、古典の翻案を通して太宰治が示した戦時下の文学状況に対する戦略を考察した。
20.村上龍「限りなく透明に近いブルー」論―自己の射影―	単	2008年3月	『東洋大学大学院紀要』、第44集、33～55頁、東洋大学大学院	村上龍の小説における文体の特徴について、語り手と主人公の位相的関係を分析し、さらにその関係性の暗喩として、テクスト内の都市が機能していることを指摘した。日本近代文学における小説文体の規範と、その前提となる主体意識のあり方が、現代文学においてどのような問題として顕在化したかを考察する。
21.村上龍「限りなく透明に近いブルー」論―透明な目と混沌としての自己―	単	2008年2月	『日本文学文化』、第7号、36～48頁、東洋大学日本文学文化学会	「限りなく透明に近いブルー」（『群像』昭和51年6月）を中心に、村上龍の初期小説における描写の視覚性と主人公の表象との関わりを考察した。村上龍の小説における文体の特徴と、主人公の自己をめぐる物語内容との対応関係を考察することで、日本近代文学における小説文体の規範を問い直し、現代文学におけるテーマの所在を模索した。
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
1.戦争の記憶と文学のことば	単	2025年1月8日	第6回 サイエンス・コモンズ・セミナー	武庫川女子大学
2.海港詩人倶楽部の夢―モダニズム前夜の竹中郁―	単	2019年5月25日	神戸文学館企画展「モダニズムの原風景　竹中郁と原田の森」記念講演会	神戸文学館
3.研究を続けていくために―世界の中の日本語・日本文学―	単	2018年7月25日	東洋大学大学院講演会	東洋大学
4.モダニズム詩人・竹中郁と神戸―海港都市のレスプリ・ヌーボー	単	2017年7月15日	神戸文学館　土曜サロン・文学講座	神戸文学館
5.野溝七生子の青春―文学少女、白山に学ぶ―	単	2017年1月28日	東洋大学男女共学100周年記念講演会	東洋大学
6.越境する想像力―「外地」から見る日本近代文学―	単	2016年12月10日	阪神近代文学会2016年度冬季大会	武庫川女子大学
２．学会発表				
1.現代詩と記憶のなかの大連―清岡卓行『アカシヤの大連』・原口統三『二十歳のエチュード』を中心に―	単	2019年11月24日	日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究集会	二松學舍大學（東京） パネル発表「経験の連続と非連続――戦後日本文学における〈外地〉」登壇者：光石亜由美・木田隆文・ 李文茹・小泉京美
2.〈現代詩〉についての覚書―モダニズム詩の再評価と『本の	単	2017年11月18日	昭和文学会2017年度秋季大会	関西学院大学（西宮）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
手帖』―				
3.故郷喪失の季節―満洲郷土化運動と満洲歳時記―	単	2013年11月16日	輔仁大学日本語文学科国際シンポジウム―文化における異郷―	輔仁大学（台北）
4.まなざしの地政学―満洲写真作家協会と満洲アヴアンガルド芸術家クラブ―	単	2012年9月	国際シンポジウム―戦間期東アジアにおける日本語文学1920～1945―	龍谷大学（京都）
5.関東大震災と日本のアヴァンギャルド―詩とリノカットをめぐって―	単	2012年6月	ワークショップ―文学理論の現在グローバルとローカルな視点から日本近代現代文学を考える―	パリ第七大学（パリ）
6.「満洲」における日本人教育と故郷喪失―秋原勝二「夜の話」「故郷喪失」を中心に―	単	2009年7月	日本文学協会、第29回研究発表大会	静岡大学（静岡）
7.滝口武士論―変容する「外地」の風景―	単	2008年12月	昭和文学会、第43回研究集会	國學院大學（東京）
３．総説				
1.詩を読むということ	単	2020年12月	『文学・語学』第230号、55～58頁、全国大学国語国文学会	
2.「外地」日本語文学の研究	単	2012年2月	『日本文学文化』、第11号、52頁、東洋大学日本文学文化学会	東洋大学日本文学文化学会の機関誌『日本文学文化』の「研究フロンティア」欄に、「外地」の日本語文学に関する研究動向をまとめた。近年、活発に議論されるようになった「外地」の日本語文学について、日本近代文学という枠組みや視点からアプローチすることの意義や、研究に取り組む際の問題点と解決策について述べた。
3.満洲	単	2010年3月	『昭和文学研究』、第60集、113～116頁、昭和文学会	昭和文学会の機関誌『昭和文学研究』の「研究動向」欄に、満洲に関する文学研究の動向をまとめた。日本で満洲に関する文学の研究が本格化してから、日本文学研究と中国文学研究が協同することで、多元的な満洲の文学状況が明らかにされてきた。近年は中国や日本の各地で国際シンポジウムが開催され、研究成果が世界に発信されている。今日に至るまでの研究の展開を概観し、今後の課題と展望を述べた。
4.戦後詩のポエティクス1935～1959	共	2009年4月	世界思想社	日本の戦後詩の概説書。 【担当箇所】Ⅱ「若いモダニストたちの挫折と死」（36～37頁）、酒井正平『小さい時間』（39頁）、日本文学報国会編『大東亜』（50頁）、東京焼け跡ヤミ市を記録する会編『東京闇市興亡史』（57頁）、吉本隆明『芸術的抵抗と挫折』（67頁）、壺井繁治他編『現代作詩講座』（83頁）、黒田三郎『ひとりの女に』（98頁） 【共著者】和田博文・青木亮人・井原あや・内海紀子・川勝麻里・熊谷昭宏・小泉京美・杉浦静・鈴木貴宇・田口麻奈・名木橋忠大・西村将洋・早川芳枝・疋田雅昭・藤本寿彦・増田周子・水谷真紀・宮崎真素美。
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.秋元裕子著『瀧口修造研究―〈影像人間〉の系譜』	単	2023年5月15日	『日本近代文学』第108集、171～174頁、日本近代文学会	秋元裕子『瀧口修造研究―〈影像人間〉の系譜』の書評
2.渡邊澄子著『植民地・朝鮮における雑誌『国民文学』』	単	2019年9月	『昭和文学研究』、第79集、155～157頁、昭和文	渡邊澄子著『植民地・朝鮮における雑誌『国民文学』』（彩流社、2018年）の書評。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
3.漱石辞典	共	2017年5月	学会 翰林書房	【担当箇所】「満洲日日新聞」 【共著者】小森陽一・飯田祐子・五味渕典嗣・佐藤泉・佐藤裕子・野網摩利子
4.楜沢健著『川柳は乱調にあり――嗤う17音字』	単	2015年11月	『日本文学』第64号、日本文学協会	楜沢健著『川柳は乱調にあり――嗤う17音字』（春陽堂書店、2014年）の書評。同書の論述の中心となる鶴彬を中心に、川柳のジャンルとしての特質や社会的批評性について述べた。
5.〈越境〉から〈跨境〉へ―東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校日本研究センター編『跨境／日本語文学研究』	単	2015年3月	『Juncture超域的日本文化研究』、第6号、202～204頁、名古屋大学大学院文学研究科附属「アジアの中の日本文化」研究センター	平成25年10月に開催された「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」と高麗大学校日本研究センターの活動を母体に創刊された日本語文学研究誌『跨境』（平成26年6月）のレビュー。学際的研究の広がりや研究環境の国際的な変化に対応してきた当該研究領域が抱える問題点や今後の課題について述べた。
6.宮崎真素美著『戦争のなかの詩人たち―「荒地」のまなざし』	単	2013年9月	『昭和文学研究』、第67集、113～115頁、昭和文学会	宮崎真素美氏の著書『戦争のなかの詩人たち―「荒地」のまなざし』（日本図書センター、平成24年9月）の書評。昭和文学会の機関誌『昭和文学研究』の書評欄に掲載された。「荒地派」を中心とする戦後詩研究を牽引してきた著者の方法論から学んだ研究の心構えについて述べた。また、研究環境の整備や資料のデジタル化の進展に伴って、近年の研究状況に新たに浮上している課題について述べた。
7.円地文子事典	共	2011年4月	鼎書房	【担当箇所】「混色の花束」（132～133頁）、「娘の戸籍」（250～251頁）、「瑠璃光寺炎上」（274頁） 【共著者】馬渡憲三郎・高野良知・竹内清己・安田義明ほか
8.戦後詩誌総覧⑧60年代詩から70年代詩へ	共	2010年8月	日外アソシエーツ	第二次世界大戦後に発行された詩誌の総目次総覧。 【担当箇所】『エスプリ』の解題および総目次（115～116頁）、『時間』昭和40年5月～昭和42年10月発行号の目次（390～432頁）、『VOU』昭和35年1月～昭和38年11月発行号の目次（713～735頁） 【共著者】和田博文・杉浦静・青木亮人・井原あや・内海紀子・川勝麻里・熊谷昭宏・小泉京美・鈴木貴宇・田口麻奈・名木橋忠大・西村将洋・早川芳枝・疋田雅昭・水谷真紀
9.戦後詩誌総覧⑦言葉のラディカリズム	共	2010年5月	日外アソシエーツ	第二次世界大戦後に発行された詩誌の総目次総覧。 【担当箇所】『火急』解題および総目次（96～97頁）、『ドラムカン』解題および総目次（490～495頁）『暴走』解題および総目次（547～551頁） 【共著者】和田博文・杉浦静・青木亮人・井原あや・内海紀子・川勝麻里・熊谷昭宏・小泉京美・鈴木貴宇・田口麻奈・名木橋忠大・西村将洋・早川芳枝・疋田雅昭・水谷真紀
10.戦後詩誌総覧⑥1950年代の〈日常〉と〈想像力〉	共	2010年2月	日外アソシエーツ	第二次世界大戦後に発行された詩誌の総目次総覧。 【担当箇所】『青鰐』解題および総目次（3～9頁）、『暦象』昭和32年4月～昭和35年3月発行号の目次（446～453頁） 【共著者】和田博文・杉浦静・青木亮人・井原あや・内海紀子・川勝麻里・熊谷昭宏・小泉京美・鈴木貴宇・田口麻奈・名木橋忠大・西村将洋・早川芳枝・疋田雅昭・水谷真紀
11.戦後詩誌総覧⑤感受性のコスモロジー	共	2009年11月	日外アソシエーツ	第二次世界大戦後に発行された詩誌の総目次総覧。 【担当箇所】『列島』の解題および総目次（19～32頁）、『アルビレオ』昭和31年1月～昭和40年3月発行号目次（137～154頁）、『詩界』昭和32年1月～昭和35年7月発行号目次（454～472頁） 【共著者】和田博文・杉浦静・青木亮人・井原あや・内海紀子・川勝麻里・熊谷昭宏・小泉京美・鈴木貴宇・田口麻奈・名木橋忠大・西村将洋・早川芳枝・疋田雅昭・水谷真紀
12.戦後詩誌総覧④第二次世界大戦後の〈実存〉と〈思想〉	共	2009年6月	日外アソシエーツ	第二次世界大戦後に発行された詩誌の総目次総覧。 【担当箇所】『高原』解題と総目次（59～69頁）、『午前』解題と総目次（85～102頁） 【共著者】和田博文・杉浦静・青木亮人・井原あや・内海紀子・川勝麻里・熊谷昭宏・小泉京美・鈴木貴宇・田口麻奈・名木橋忠大・西村将洋・早川芳枝・疋田雅昭・水谷真紀
13.戦後詩誌総覧③戦後	共	2009年1月	日外アソシエーツ	第二次世界大戦後に発行された詩誌の総目次総覧。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
詩のメディアⅢ「ユリイカ」「歴程」				【担当箇所】『歴程』昭和41年4月～昭和43年3月発行号目次（334～347頁） 【共著者】和田博文・杉浦静・青木亮人・井原あや・内海紀子・川勝麻里・熊谷昭宏・小泉京美・鈴木貴宇・田口麻奈・名木橋忠大・西村将洋・早川芳枝・疋田雅昭・水谷真紀
14.戦後詩誌総覧②戦後詩のメディアⅡ「詩学」「詩と批評」「詩と思想」	共	2008年12月	日外アソシエーツ	第二次世界大戦後に発行された詩誌の総目次総覧。 【担当箇所】『詩学』昭和35年1月～昭和36年12月発行号目次（305～361頁） 【共著者】和田博文・杉浦静・青木亮人・井原あや・内海紀子・川勝麻里・熊谷昭宏・小泉京美・鈴木貴宇・田口麻奈・名木橋忠大・西村将洋・早川芳枝・疋田雅昭・水谷真紀
15.室生犀星事典	共	2008年7月	鼎書房	【担当箇所】「水・氷」（533～534頁）、「雪・雨・風」（538～539頁） 【共著者】葉山修平・大森盛和・笠森勇・志村有弘・竹内清己・船登芳雄ほか
16.現代詩大事典	共	2008年2月	三省堂	【担当箇所】「添田唖蝉坊」（35頁）、「月原橙一郎」（583～584頁）、「野田理一」（388頁）、「山崎泰雄」（456頁）、「アルビレオ」（527～528頁）、「葡萄園」（677頁）、「近・現代詩史年表」（745～781頁） 【共著者】安藤元雄・大岡信・中村稔・大塚常樹・勝原晴希・國生雅子・澤正宏・島村輝・杉浦静・宮崎真素美・和田博文・小泉京美・疋田雅昭・水谷真紀
17.戦後詩誌総覧①戦後詩のメディアⅠ「現代詩手帖」「日本未来派」	共	2007年12月	日外アソシエーツ	第二次世界大戦後に発行された詩誌の総目次総覧。 【担当箇所】『現代詩手帖』昭和42年1月～12月発行号目次（197～217頁）、『日本未来派』昭和30年10月～昭和33年2月発行号目次（503～520頁） 【共著者】和田博文・杉浦静・青木亮人・井原あや・内海紀子・川勝麻里・熊谷昭宏・小泉京美・鈴木貴宇・田口麻奈・名木橋忠大・西村将洋・早川芳枝・疋田雅昭・水谷真紀
６．研究費の取得状況				
1.科学研究費補助金 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))18KK0007	共	2018年10月～2025年3月		研究代表者：飯田祐子（名古屋大学） 研究課題名：1930年代における東アジア女性雑誌の比較研究
2.科学研究費補助金 研究活動スタート支援　16H07396	単	2016年8月～2018年3月		研究題目名：旧植民地下の日本語文学と戦後文学における植民地表象の通史的研究
3.科学研究費補助金 特別研究員奨励費 11J00724	単	2011年4月～2014年3月		研究課題名：アジアにおける日本語文学の歴史的展開と植民地

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2016年8月～2018年8月	昭和文学会編集委員
2.2011年4月～2013年7月	日本文学文化学会校友役員
3.2011年4月～2013年3月	日本近代文学会運営委員